

大会

禅
竹
作

前

ワキ
僧正

シテ
山伏

後

シテ
天狗

ワキ
前に同じ

ツレ
帝釈天

地は
山城

季は
雑

ワキサシ

「それ一代の教法は。五時八教をけづり。教内教外を分たれたり。五時と云つば。華嚴阿含方等般若法華。四教とは是れ藏通別円たり。遮那教主の秘藏を受け。五想成身の峰を開きしより以来。たれか仏法を崇敬せざらん。げに有難き御法とかや。

地

「鷲の御山をうつすなる。く。一仏乗の嶺には。真如の恵日まとかなり。鳥三宝を念じて。風常樂と音づるゝ。げにたぐひなき深山かな。く。

シテサシ

「月は古殿の灯をかゝげ。風は空廊の箒となつて。石上に塵なく滑らかなる。苔路をあゆみよるべの水。あら心すごの山洞やな。

詞

「いかに此庵室の内へ案内申し候。

ワキ詞

「我ぜんかんの窓に向ひ心を澄ます処に。案内申さんとは如何なるものぞ。

シテ詞

「是は此あたりに住居する客僧にて候。我既に身まかるべきを。御憐みにより命たすかり申すこと。

かへすぐも有がたう候。此事申さん為に是まで
まるりて候。

ワキ「是はおもひもよらぬ事を承り候ふ物かな。命をた
すけ申すとは更に思ひもよらず候。

シテ「都東北院のあたりにての御事なり。定めて思し召
し合はすべし。かばかりの御こゝろざし。などか
は申し上げざらん。此報恩に何事にてもあれ。御
望みの事候はゞ。刹那に叶へ申すべし。

ワキ「げにさる事のありしなり。又望みを叶へ給はん事。
此世の望み更になし。たゞし釈尊霊鷲山にての御
説法のありさま。まのあたりに拝み申したくこそ
候へ。

シテ「それこそ易き御望みなれ。まこと左様に思しめさ
ば。すなはち拝ませ申すべしさりながら。貴しと
思しめすならば。かならず我為めあしかるべし。
かまひて疑ひ給ふなと。

地

「かへすぐも約諾し。く。さあらばあれに見え
たる。杉一村に立ちよりて。目をふさぎ待ち給へ。
仏の御声のきこえなば。其時両眼をひらきて。よ
くく御覧候へと。いふかとみれば雲霧。ふりく
る雨の足音。ほろくとあゆみ行く道の。木の葉
をさつと吹きあげて。梢にさがり谷にくだり。か
き消すやうに失せにけり。く。(中入)

後ジテ

「それ山はちひさき土くれを生ず。かるがゆゑに高

き事をなし。海は細き流れをいとはず。故に深き
事をなす。

地

「ふしぎや虚空に音楽ひゞき。く。仏の御声あら
たに聞ゆ。両眼をひらきあたりを見れば。

シテ

「山はすなはち靈山となり。

地

「大地は金瑠璃。

シテ

「木は又七重宝樹となつて。

地

「釈迦如来獅子の座に。あらはれ給へば。普賢文珠

左右に居給へり。菩薩聖衆雲霞の如し。砂の上には龍神八部。おのく拝し圍繞せり。

シテ「加葉阿難の大声聞。

地「加葉阿難の大声聞は。一面に坐せり。空より四種の花ふりくだり。天人雲に。つらなり微妙の音楽を奏す。如来肝心の法文を説き給ふ。実にありがたきけしきかな。

ワキ「僧正其時たちまちに。

地「僧正其時たちまちに。信心を發し。随喜の涙眼に浮び。一心に合掌し。歸命頂礼大恩教主。釈迦如来と。恭敬礼拝するほどに。俄に台嶺ひゞき震動し。帝釈天よりくだり給ふを。見るより天狗おのくさわぎ。恐れをなしける不思議さよ。

地「刹那が間に喜見城のく。帝釈あらはれ数千の魔術を。あさまになせば。有りつる大会。ちりぐくになつてぞ見えたりける。

帝釈
「帝釈此時いかり給ひ。」

地
「帝釈此時いかり給ひ。かばかりの信者をなど驚かす。たちまちさんぐに苦を見せ給へば。羽風をたてゝ翔らんとすれども。もぢり羽になつて飛行も叶はねば。おそれ奉り拝し申せば。帝釈すなはち雲路をさして。あがらせ給ふ。其時天狗は岩根をつたひ。くだるとぞ見えし。いはねをつたひ下ると見えて。深谷の岩洞に入りけり。」